令和８年　１月 25 日

第 19 回 THE　FOOTBALL CONFERENCE　HYOGO　2026　報告書

【1】日時　令和８年１月 25 日(日)10:30～16:30

【2】会場　甲南大学　岡本キャンパス

【3】講師　川俣　則幸氏

（JFA 指導者養成サブダイレクター）

【4】人数　210 人

【5】内容

1. オープニング

（一社）兵庫県サッカー協会　会長　林　啓司

・北中米ワールドカップについての期待

・中体連の部活動地域連携について

2. ご挨拶　（一社）兵庫県サッカー協会

ユースダイレクター　浦元　健太郎

・自己紹介

・ユースダイレクター活動報告

①トレセン活動について

兵庫県として目指すべきトレセン活動の在り方について

②各種別委員会・技術委員会　報告

プレーヤーズファーストの意識の浸透、暑熱対策、少子化・部活動地域連携、公平性・安全性の確保

3. 講演①「Japan‘s way ver2 と世界の指導者養成について」

JFA 指導者養成サブダイレクター　川俣　則幸氏

2022年の7月に Japan‘s way ver1 が発表され、そこから約4年、Japan‘s way ver2 が 2026 年の１月に新たに作成された。プロリーグが生まれ、ワールドカップ出場が目標だった時期を経て、今や優勝を目標に掲げるまでに成長した。この目標を達成するために Japan‘s way ver1 がつくられたのである。今回の Japan‘s way ver2 改訂の内容としては《三位一体＋普及の重要性　世界基準から、世界トップ基準へ》《タレント ID》《安心・安全の環境構築の重要性を強調》、大きな変更点はないが、より夢の実現に向けてのバージョンアップとなっている。『楽しむサッカー』と『競技としてのサッカー』両方の山を大切にしながら、その中でサッカーを楽しむ環境づくりやプレービジョン、育成年代での国際試合の重要性など、世界のトップ基準を念頭に置いて作成されているので、また改めて JFA ホームページでも確認いただきたい。育成年代のなかで『良い環境』を構築していくことが、我々指導者に求められている。選手達が安心・安全にサッカーを楽しむことができるために、 そして『ありたき姿』に近づくためにも、この Japan‘s way を参考にしていただきたい。

4. 講演②「ユース年代における世界を意識した育成」

JFA 指導者養成サブダイレクター　川俣　則幸氏

午前の講義に続く形で、ユース年代における目指していく選手育成について考察、共有。《どんなサッカーがしたい》《こんな選手になってほしい》といった、各チームの philosophy があり、それをもとに望まれる選手像（プレービジョン）が、生まれてくるのではないだろうか。JFA では【攻撃】におけるプレービジョン、【守備】におけるプレービジョン、4 局面を踏まえたプレービジョン、これらを『世界のトップ』基準で育成の各年代から最終的には A 代表のプレービジョンに向けてガイドラインを作成している。（映像） また、TOP レベルに到達する選手を発掘・育成していくにあたり「タレント ID」というものを作り、育成の過程を蓄積、活用していくことも大切である。TOP レベルに到達するために必要な要素として「適正」「向上心」「規律」「学ぶ姿勢」があげられる。選手の成長には個人差があり、成長のキーステージに応じて診断や育成のポイントを押さえて選手たちに向き合わなければならない。また、選手は勝手には育たない。どのように選手を育てるのかという「コーチングフィロソフィー」を指導者が持ち、「IDP」個別育成プランを立てて取り組んでいくことが大切である。指導者は選手が主体的にプレーし、自ら学ぶ環境を作っていくためにも、アップデートやブラッシュアップが必要になってくる。Pro ライセンス・GP-A ライセンス講習会の紹介を通して、日本の宝である選手たちのためにコーチとしての成長を。

5. 東京 2025 デフリンピック　活動報告

（一社）兵庫県サッカー協会指導者養成部　　飛石　孝行

「Deaf デフ」という聴覚障害のある人々が参加する国際的なスポーツ大会を「デフリンピック」といい、100 周年を迎える 2025 年にアジアで初めて東京にて開催された。「音のない世界」での指導・チーム戦術の浸透に対する課題を、スタッフ一同で向き合い、話し合いを重ねながらチャレンジし、『銀メダル』という結果を得ることができた。この結果は全てのスタッフ・選手がお互いの立場を理解しながら、『信頼』を築くことができたからである。デフサッカーは、障がいの有無を越え、人と人がつながり、支え合い、高め合う力を持つスポーツだと感じる。この競技をもっと多くの人に知ってもらい、多くの人に勇気と希望を届けられると信じている。

6.　2025 指導者養成部活動報告・障がい者サッカー

知的障がい者サッカーB ライセンスコース報告

（一社）兵庫県サッカー協会指導者養成副部長　三浦　清司

・『2023 の約束』について

・指導者養成事業活動　報告

・2026 重点事項

・障がい者サッカーについて

サッカーを「楽しみたい」気持ちは障害を持つ人も同様である。一般の障がい者がスポーツ（サッカー）を楽しむ機会を増やしていきたい。障がい者へのアンケートにて、スポーツをしない理由を聞いたところ「特になし」。つまり機会がない・場所がないという課題がある。理解を深め、もっと身近に障がい者スポーツがある環境を兵庫県として取り組んでいきたい。中でもサッカーというスポーツは大きな役割があると感じている。また近年は教育環境の中に「特性」を持っている生徒が多く在籍している。「合理的配慮」の研鑽を深めながら、誰もがスポーツを楽しめる社会を目指していきたい。『サッカーならどんな障害も乗り越えられる』

7. クロージング 「サッカーの未来」

（一社）兵庫県サッカー協会指導者養成部長 鈴木　義章

「楽しむ」から「真剣に楽しむ」そのための環境の追求。今の子供のスポーツ環境、指導者の資格保有数、その中で、サッカー界の有資格者は他のスポーツに比べ多く、暴力根絶への取り組みも積極的に行われている。ただ、根絶には至っていない現状もある。有資格者であっても経験がない、もしくは浅い人たちの指導現場の確保。そこには待遇や補償、社会の認知度と文化としての成熟度が関係し、指導環境の整備等の課題がまだある。皆さんも指導者として、「自分の言動を振り返り」「好きだからこそ本質を追求し」「真剣に取り組むことでより楽しむ」など、選手の未来に触れている我々指導者が自己研鑽を積み、これからの指導者生活に活かしていただきたい。

川俣　則幸氏

報告者　　黒田　達也